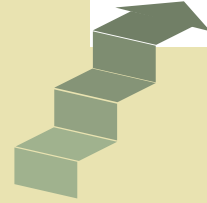


上信電鉄0番線

日本最古の電気機関車デキも走る



歴史あるローカル私鉄で富岡製糸場へ

●昭和の香りが漂う0番線ホーム

高崎駅西口の名物、階段下の立ち食いスタンドの横から旧1番線ホームに入ると、上信高崎の改札が見えてくる。切符の自動販売機など新しい設備も置かれているが、ローカル線ならではの懐かしい雰囲気にも包まれている。

切符売場の窓口では、厚紙の懐かしい切符「硬券」も売っている。さすがにハサミで切符に切り込みを入れる「入鋏」はなくてスタンプ印だが、駅員さんのいる改札口はとてまあたかい。

●0番線の歴史

上信電鉄は、かつては富岡製糸場や沿線で生産された繭や生糸も輸送し、西群馬の産業を支えた鉄道だ。大手を除き、現存するローカル私鉄として国内2番目の歴史がある。前身の上野鉄道は沿線の物産や日用品を輸送する目的で設立され、明治30年

(1897)に高崎・下仁田間33・7kmが開通した。高崎・上野間の開通から13年後のことだった。

開通当初のレール間隔は高崎線の1,087mmよりも狭い762mmの軽便鉄道で、イギリス製の蒸気機関車が一日7往復運転した。高崎から下仁田まで2時間30分かかった。レール幅が違うために貨物を高崎駅で積み替えなければならず、輸送力増強のためにレール間隔の拡張と電化を進め、大正12年に、県内の私鉄で初めて全線電化となった。レール間隔が国鉄と同じになったことで、高崎駅への乗り入れが実現した。

ホーム番号は駅長室に近い方から付けられるのが慣例で、1番線の手前に上信線ホームができたので0番線になったようだ。鉄道ファンが数えたところによれば、全国に0番線は40カ所しかないそうだ。

●90年間走る日本最古の電気機関車デキ

上信電鉄の名物は日本最古の電気機関車デキだ。90年前の大正13年

(1924)にドイツから3台購入され、そのうち2台が今なお動いている。凸型の車体でファンには「上州のシーラカンス」と親しまれている。デキを見たという要望は多いそうだが、老朽化し、部品も無いために修理が難しく、延命のために残念ながらイベントなどでしかお目にかかれない。

●私鉄沿線の世界遺産は国内初

平成25年12月には上信電鉄オリジナル車両7000形車両が運行開始、上州富岡駅も26年3月に新駅舎となり、富岡製糸場の玄関として生まれ変わっている。

世界遺産登録で脚光を浴びている富岡製糸場は、上信電鉄の上州富岡駅から徒歩で10分。私鉄沿線の世界遺産は国内初、しかも駅から近いので、電車の旅で富岡製糸場に訪れる人が増えている。高崎から上州富岡までは約40分、往復乗車券と富岡製糸場入場券をセットにしたお得な割引乗車券も販売中。また、今秋には南高崎・根小屋間に新駅「佐野のわたし」駅が開設される。